

## 児童・生徒の共生を促す体育の授業づくりに関する研究 －障害の有無と性差に着目して－

スポーツ文化研究領域

5017A039-3 竹原 由梨

研究指導教員： 吉永 武史 准教授

### 【問題の所在と目的】

現在、我が国は、少子高齢化やグローバル化、情報化社会といったことが取り沙汰され、変化の激しい社会といわれている。各省庁では、こうした社会状況に伴って人間関係が希薄化していくことを危惧しており、年齢や性別、障害の有無といった多様な人々と共生する社会が目指されている。

また、学校教育においては、児童・生徒の問題行動の増加や、通常の学級において障害やその疑いのある児童・生徒の在籍率が増加傾向にあること等の問題を受け、平成29(2017)年の学習指導要領改訂にあたり、「共生」について言及された。特に、体育科(保健体育科)では「共生の視点を重視して改善を図ること」(文部科学省, 2018a, p. 8; 文部科学省, 2018b, p. 10)が明示された。このように、学校教育において児童・生徒の共生が求められているにも関わらず、その実現に向けた具体的方策等については、先行研究を概観する限り散見されない。

そこで本研究では、児童・生徒の共生を促す体育の授業づくりについて検討し、その学習成果を検証することを目的とした。

### 【第1章】

第1章では、今後学校教育に求められる、障害の有無及び男女という多様性を乗り越えた児童・生徒の共生を促す体育の授業づくりを進めるための予備的検討を行った。

まず、新指導要領が告示されるに至るまでの過程で、児童・生徒の共生がどのように

議論されてきたのかを中央教育審議会答申等から検討した結果、共生とは、他者や自分の多様性を理解し、認め、尊重すること、また、その多様な他者と協働することと捉えられていることが明らかになった。これを踏まえ、障害の有無と性差という多様性に焦点を当て、児童・生徒の共生を促す体育の授業づくりにおいて必要な配慮とは何かについて検討した。

障害の有無では、特別支援教育やインクルーシブ体育において発達障害のある児童・生徒に必要とされる配慮を踏まえた上で、障害のある児童・生徒が在籍する通常の学級における体育授業で必要とされる配慮や工夫について明らかにした。また、性差では、体育授業において障壁となる性差の特徴を踏まえた上で、必要とされる配慮や工夫について明らかにした。これらの検討の結果、児童・生徒の共生を促す体育の授業づくりを進める上で、「グルーピングにおける配慮」、「教材・教具の工夫」、「他者との関わり方に関する工夫」の3点が重要であるという示唆が得られた。

### 【第2章】

第2章では、第1章の考察を通して得られた児童・生徒の共生を促すための3点の工夫を取り入れた授業計画を作成し、実践的検討①を実施した。実践的検討①は、埼玉県内の公立F小学校の6年生1クラスを対象にハンドボールの単元において行った。

その結果、グルーピングにおける配慮で

は、障害のある児童をサポートできるよう配慮したグルーピングが児童の共生を促すために有効であることが示唆された。教材・教具の工夫では、児童の技能の習熟度を確認しながら教材の課題のレベルを柔軟に変更することの重要性が示唆された。他者との関わり方に関する工夫では、プレゼントカードを導入し、他者と関わる機会や他者について考える機会が増えたことによって、児童同士の関わり合いがより肯定的なものへと変容していったと推察された。

以上のことから、障害の有無を乗り越えた児童の共生を促せたのではないかと推察された。一方で、①障害のある児童に対する、技能の向上を自覚できるような視聴覚教材の工夫、②話し合い場面での障害のある児童への配慮の必要性、③他の障害のある児童・生徒が在籍するクラスでの適用可能性、の3点が課題としてあげられた。

### 【第3章】

第3章では、第1章の考察を通して得られた児童・生徒の共生を促すための3点の工夫を取り入れた授業計画を作成し、実践的検討②を実施した。実践的検討②は、東京都内の公立M中学校2年生1クラスを対象に現代的なリズムのダンスの単元において行った。

その結果、グルーピングにおける配慮では、コミュニケーション能力や人間関係、恋愛関係等の生徒の特徴やダンス経験の有無等について熟考し、各グループにバランスよく配置したグルーピングが生徒の共生を促すために有効であると示唆された。教材・教具の工夫では、男性的なイメージで生徒になじみのある曲やダンスを取り入れることが男女関係なく取り組むために有効であると示唆された。また、現代的なリズムのダン

スのような、決まったステップがあるダンスを授業で取り上げる場合には、リズムに乗ることを楽しむというダンスならではの楽しさを味わわせることの重要性が明らかとなった。他者との関わり方に関する工夫では、プレゼントカードを通して、生徒が集団における人それぞれの役割やその人自身の個性を認め、評価できるようになり、生徒同士の関わり合いが肯定的に変容したと推察された。

以上のことから、性差を乗り越えた生徒の共生を促せたのではないかと推察された。一方で、①男子生徒のダンスへの抵抗感を払拭できる教材の設定、②女子生徒の有能感を高めるための教師行動や、生徒同士で行える観察方法の工夫、③女子の抵抗感が強いとされる他の種目での適用可能性、の3点が課題としてあげられた。

### 【結章】

本研究では、「グルーピングにおける配慮」、「教材・教具の工夫」、「他者との関わり方に関する工夫」の3つの工夫を適用した体育の授業づくりは、児童・生徒の共生を促すための一助になったといえる。

しかし、共生に関する評価において、仲間づくりの形成的授業評価を用いたが、共生を評価するには不十分な点がみられたため、共生に関する新たな評価尺度を開発する必要がある。また、障害の有無や性差以外の多様性が対象となった場合の適用可能性について更なる検討が必要であるといえよう。

### 【主要・引用参考文献】

- 文部科学省(2018a) 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館: 東京.
- 文部科学省(2018b) 中学校学習指導要領解説 体育編. 東山書房: 京都.